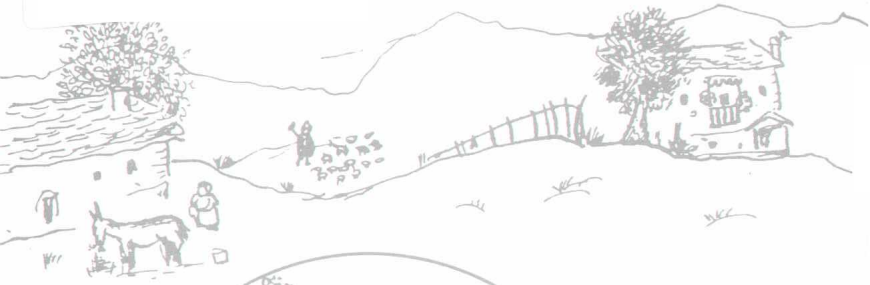
ギリシアの誘惑

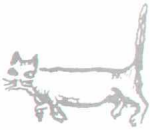
池澤夏樹



ギリシアの誘惑

池澤夏樹

書肆山田



ギリシアの誘惑＊著者池澤夏樹＊一九八七年四月一〇日
初版第一刷発行＊発行者鈴木一民発行所書肆山田東京都
豊島区南池袋二―八―五―三〇一電話〇三―九八八―七四
六七＊印刷シナノ印刷株式会社イナバ巧芸社製本山本製
本所＊一〇九〇―一一二七―三四二四＊定価一八〇〇円

ギリシアの誘惑　池澤夏樹　書肆山田

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

目次——ギリシアの誘惑

アテネ物語 9
ギリシア　夏 39
ギリシア　冬 47
トロイゼンからの道 53
エーゲ海の島々 81
サントリニ紀行 89
都市の星座 127

イスタンブールにはじまる　163
エリティスと二十世紀ギリシアの詩人たち　171
あとがき　207

付録　エリティス『モノグラム』　別刷
装画　ミノス・アルギラーキス

ギリシアの誘惑

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

アテネ物語

仮面の裏の素顔

アテネは、古典劇の役者のように、仮面をかぶっていてなかなか素顔を見せない。しかし、その仮面というのは外からこの町を訪れる者の勝手な誤解であって、アテネ人に言わせれば、あらぬかたに目をやっていて素顔を見ない方が悪いということになる。

第一の仮面は、ここがきわめて古い町だという勘違い。古代ギリシアで最も有力だった都市国家アテネのことを書かない教科書はない。そこで人は、古代へ旅行するようなつもりでこの町へ来て、石の遺跡だけを見、早々と帰ってゆく。あるいはここが二千数百年のあいだ連綿と続いた町であるように思い、古代ギリシアの雰囲気が町全体にみなぎっているかと期待する。

だが、アテネの町全体が古典ギリシア文化の博物館なのではない。それは不健全というものだ。ここは現代の町で、いろいろ問題はあるにしても現代風に繁栄していることをまず認めなくてはならない。

十九世紀のはじめにギリシアが近代国家として独立した時、アテネはアクロポリスの丘の北側に数百の人家が点在する田舎町に過ぎなかった。そこを、古代をかつぐ人々が首都にしたてあげたのだ。一九二〇年になっても人口はまだ三十万人だった。今、遺跡だけでなく少しは町そのものにも目をむけんとする観光客がバスやタクシーの窓から見る家並みは、ほかのヨーロッパの町と較べれば、ずっと新しいのだ。つまり、非常に古い部分と大層新しい部分が共存していて、それをつなぐものがないという、奇妙な町。

第二の仮面は、ここがヨーロッパだという考え。欧州の一部には違いない。東ヨーロッパの最南端である。だが、ここまで来るとフランスやドイツやスイスとはまったく違ったものが空気に混じる。東欧と南欧にはどこか準ヨーロッパの印象がある。なにかが欠けているだけではなく、大変に強い、粗い、暖い、人に地面にすわることをうながすような、匂いが加わる。そしてギリシアは東欧であってしかも南欧なのだ。

アテネの人々は今はみな西の方をむいており、無理をしてECに入ったりする。だから町並みや服装といった生活の表面だけを見ていてもわからないのだが、もっとごまかしようの

ないもの、食物や踊りや迷信や結婚や宗教に注目すると、ここが意外に東寄りの性格をもっていることがわかる。四百年間のトルコによる支配だけが理由ではない。小アジアはすぐ隣だし、キプロス、パレスティナ、エジプトは海路で結ばれた身近な地名なのだ。

聖俗二つの軸

この町の概念的な地理はすぐにも頭に入る。まず、三方が山で、南西の方角だけはピレウスの港をへて海に面している。このせまい平野の中に丘が二つそそり立っている。一方はさほど高くなくて上もたいらだが、もう一方は高くとがっている。たいらなのがアクロポリス、とがった方がリカヴィトス。町中どこからでもこの二つの丘は見える。この二つを結ぶ線が町の第一の軸になる。

アクロポリスの上には、パルテノン神殿をはじめとするいくつもの遺跡がある。リカヴィトスの頂上には聖ゲオルギオスの小さな教会がある。今はケーブル・カーで登れるが、かつて人は息を切らして細い道を登らなくてはならなかった。この丘の上がアテネ中で最も神に近い。

二つの丘のちょうど真ん中に広場がある。シンタグマ、つまり憲法広場と呼ばれ、これを旧王宮であるところの現国会議事堂、いくつもの銀行、航空会社のオフィス、由緒あるホテルなどがとりまいている。この広場がアテネの一番よそいきの顔、ヨーロッパ風で、観光むけの顔である。外国の雑誌や新聞を買うにはここのキオスクに行かなくてはならない。外国人はみなこの広場から用心ぶかく街路を歩きはじめる。この広場の鳩はあまやかされていて、かわいげがない。

さて、重要な広場はもう一つある。オモニア広場。こちらは本当のギリシアの顔だ。田舎や島から首都へ出てきたギリシア人は、まずこの広場に来て、それから各自の縁者の家へむかう。なにせ急速に人口が増えた町だから、だれもが田舎に親類をもっている。この広場にはこの町にただ一本の地下鉄の駅があり、全体に雑然として、活気と匂いが充満する。アパートの部屋の塗りかえをするペンキ屋たちが、長い柄のついたブラシを持って、注文主が来るのを待っている。大道商人が店をひろげて大声で客を呼ぶ。中央市場もすぐそばだし、百貨店も近い。

これら二つの広場を結ぶ線がアテネの第二の軸になる。この軸に沿った二本の広い道にならぶ建物は、それぞれへの距離に応じて性格を決める。シンタグマに近い店は高級で、西欧的で、気取っているが、オモニアの方へ歩くにつれて日常的で、田舎っぽく、ギリシアらし

くなる。

かくて、聖の面では古典期とキリスト教が第一の軸に沿って展開され、俗の面では西欧指向と田舎への回帰が第二の軸の両端に象徴される。アテネの精神生活は地理によって完全に表現されている。

タヴェルナの一夜

人を知るには、働いているところより、遊ぶところを見たほうがいい。夏の一夜、アテネの友人たちと遊ぶとしよう。どこかのカフェニオンで七時という約束になっているとすれば、最初の一人が来るのが七時十五分、全員の顔がそろうのはたぶん八時。細かいことに無頓着なせいもあるが、一つには最初の一人になってほかのだれかが来るのを待つ、その淋しさがいやなのだ。

しばらくは喋る。実によく喋る。声も大きく、身ぶりも大きい。ひとしきり喋ったあとで、それから何をするか案が出はじめる。芝居に行くことが決まったとしよう。開幕が九時か九時半。映画館はだいたい夏は閉めてしまい、そのかわりにアパートの空地などにスクリーン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.